

## 独思録：「自民党の内紛」(7/19)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

麻生総理大臣は、今回はぶれずに「私は、基本的に、逃げずに戦わなければならない。」とテレビのインタビューに答えています。

反麻生勢力は衆院解散をめぐり、「麻生降ろし」を狙った両院議員総会も開催を阻まれたことに、旗振り役も「三木降ろしや大平・福田元首相の対決に比べると今回はそんなに激しく、激しく戦うエネルギーもない。」と嘆いているだけのようです。

またまた、坂口安吾の「総理大臣が貰った手紙の話」のお出ましをお願いしました。

「いつの頃だか知らないが、或る日総理大臣官邸へ書留の手紙がとどいた。大変分厚だ。危険と書いた道路の建札と同じぐらゐ大きな書体で、親展と朱肉で捺してあるのである。けれども、なんにも役に立たない。

かういふ手紙を読むために一役ありついた役人がゐて、つまらなそうな顔をしながら毎日手紙を読んでゐる。この役人が開いてみると、ザッと次のやうな大意のことが書いてあつた。」

という行で始まります。

思うに、麻生総理への手紙は国民からは無く、反麻生勢力から「麻生降ろし」の「両院議員総会開催要請」の手紙がほとんどであったと思われます。では、どのようにそれらの手紙は処理されているのでしょうか。

自民党サイドでは、

「都議選大敗以降、連日総理大臣官邸へ書留の手紙が沢山とどいている。全て大変分厚だ。衆院選が危ないと大きな書体で書かれ、親展と朱肉で捺してあるのである。けれども、なんにも役に立たない。

かういふ手紙を捨てるために一役ありついた党執行部があつて、またかというような顔をしながら毎日手紙を捨ててゐる。この党執行部が偶に開いてみると、ザッと両院議員総会開催のやうなことが書いてあつた。」

と云うやうな現状と思います。

結局、いつもどおり、党執行部は両院議員総会を開催せず、非公開の両院議員懇談会でお茶を濁すことで解散までの混乱を乗り切りました。

反旗を翻しても党公認を外され、無所属で小選挙区に出馬すれば、ただでさえ民主党優勢が伝えられるなか、比例区復活の目はなくなる状況では、いくら麻生自民党が不人気でも離党には踏み切れないようです。皆、選挙に負ければ「只の人」を恐れているようです。まさに、党執行部のシナリオどおりです。

坂口安吾が書いた、

「国のことを心配するのは大臣だけではないのである。思はぬところで色々の人が心を痛めてゐるのである。そこでつひ思ひ余つて、総理大臣へ手紙を書く。新聞雑誌は相手にな

つて呉れないし、警察へ出頭して日頃の意見を開陳しても気遣扱ひするからである。総理大臣が読んでくれればなんとかなるかも知れないが、これがさつきも言ふ通り、かういふ手紙を読むために一役ありついた役人がゐて、この男がつまらなさうな顔をしながら毎日手紙を読んでゐる。

で、この男がつまらなさうな顔をしながら、この手紙を読んでしまつた。さうして、アッアッアと背延びをしながら紙屑籠へ投げこんだから、どこの紳士だか知らないが、女房子供に気を配つて油断なく書き上げた手紙であらうに、なんにもならなくなつたのである。」

のと同じように、反麻生勢力は無力感に打ちひしがれているでしょう。今の自民党は国民を無視し、「国のことを心配するのは自民党だけではないのである。思はぬところで無党派の人が心を痛めてゐるのである。そこでつひ思ひ余つて、民主党に投票する。」

することを忘れてゐる。

それでも反麻生勢力は、

「新聞雑誌の番組へ出演する。党本部へ出向いて「麻生降ろし」の意見を開陳しようとしても党執行部が危険人物扱ひするからである。

党執行部が聞き入れてくれなくても、新聞雑誌の番組に出演して顔を売れる議院は何とかなるかも知れないが、これがさつきも言ふ通り、かういふ公認候補を管理するために一役ありついた党執行部があつて、8月30日の衆院選に向けて、この党執行部がしたり顔をしながら毎日公認を機械的に処理してゐる。

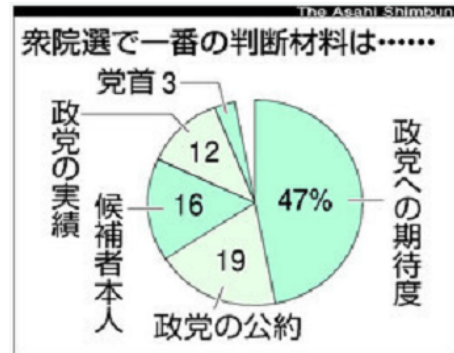
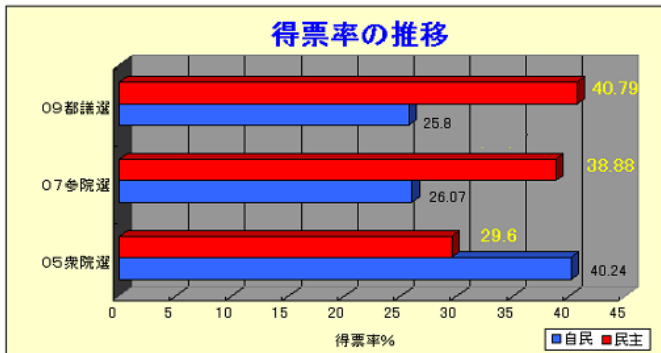
で、この党執行部がしたり顔をしながら、この「両院議員総会開催要請」の名簿を読んでしまつた。さうして、アッアッアと背延びをしながらゴミ箱へ移動せずに、記録として残したから、どこの議員だか知らないが、党執行部に気を配つて、「両院議員総会開催要請」には署名したが、「麻生降ろし」には加担していないと、油断なく書き上げた釈明書であらうに、なんにもならなくなつたのである。」

というような見苦しい状態に陥っています。

#### 朝日「実績より「今後の期待」で投票76% 朝日新聞世論調査」(7/18)

衆院選で投票先を決めるときの判断材料について、朝日新聞社は郵送による世論調査を実施した。政党の「これまでの実績」と「これからの期待」では、「期待」を重視する人が76%と、「実績」の20%を圧倒した。投票した政党が政権を担当し、実績が期待外れだったとき、次の選挙では「別の政党に投票」が59%で、「同じ政党に投票」の24%を大きく上回った。

これまでの国政選挙で投票先の政党がだいたい同じだった人は79%いるが、今後の見通しを聞くと、「だいたい同じ」は55%に下がり、「そのたびに変えることが多くなる」が37%になる。これまで「だいたい同じ」だった人でも約3割は変えることを予想している。



< 坂口安吾 (1906-1955) >

小説家、エッセイスト。本名は炳五（へいご）。新潟県新潟市西大畑町（現・中央区西大畑町）生まれ。代用教員を経て東洋大学文学部印度哲学倫理科卒業。



純文学のみならず、歴史小説、推理小説、文芸エッセイまで幅広く活動。

1946年に発表した『墮落論』は終戦後の暗澹たる世相の中で、戦時中の倫理を否定し、「墮ちきること」を肯定して多大な反響を呼び、小説『白痴』との2作によって戦後の世相に大きな影響を与える。

また、太宰治、石川淳、織田作之助らと共に新文学の旗手とされ、無頼派、新戯作派と呼ばれる。

作品に『吹雪物語』『白痴』『桜の森の満開の下』『墮落論』『FARCE に就いて』『日本文化私観』『文学のふるさと』『教祖の文学』など。

### 春秋：「理念の劣化」(7/14)

いつまでも王座を守れるわけではない。そう覚悟はしていたはずだった。それでも現実の数字を見るまで、本当の敗北の苦い味は知らなかった。麒麟ホールディングスの加藤壹康社長の転機は、米国に駐在していた43歳のとききた。

1987年、ライバルのアサヒビールが業界の伝統を破る辛口の「スーパードライ」を発売。市場シェアを爆発的に伸ばし、それまで盤石にみえた麒麟の地位が崩れ始めた。負け戦を海外で傍観するのは、さぞ悔しかっただろう。サントリーと経営統合を目指す果敢なM&A戦略。その原点は敗戦の記憶にある。

都議選で惨敗した自民党はどうか。一夜にして10議席を失い、ライバルの民主党は20議席も増やした。敗色が濃厚といわれ続けながら、実際に結果が出るまで麻生太郎首相の表情には今ひとつ緊迫感がなかった。あたふたと衆院解散と総選挙を決めたが、政権への不信は国民の間でも自民党内でも高まるばかりだ。

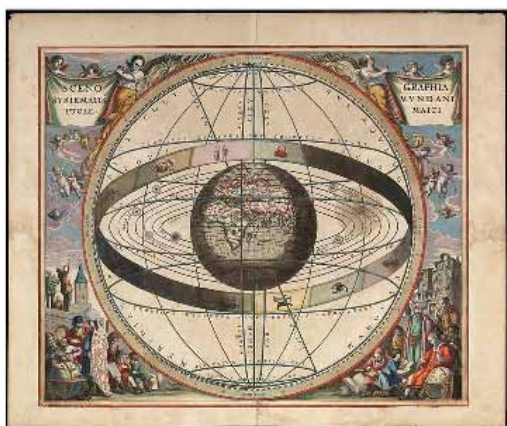
麒麟の加藤社長は、「ドライ戦争」に敗れて半世紀ぶりに首位から転落した原因をこう振り返る。「お客様本位と品質本位という本来の理念が劣化し、会社がお客様から離れてしまった」。シェア1位が長く続いた結果、自己中心の天動説に陥っていたという反省である。国民から離れた政党の命運にも通じる。

#### <天動説>

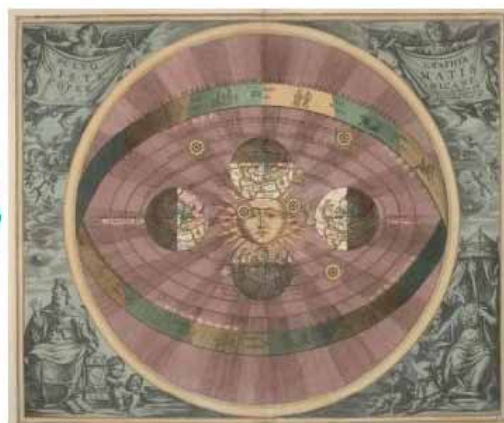
すべての天体が地球の周りを公転しているという学説のこと。

2世紀にプトレマイオスが体系を完成させ、13世紀から17世紀頃までは、カトリック教会公認の世界観だった。

プトレマイオスの体系では、地球から月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星の順に積み重ねていき、その外側を恒星球が取り囲むもので、当時としては非常に優れたものであり、それ以降の天動説の発展は、楕円運動を円運動で説明せんがための発展であった。



天動説



地動説

### 天声人語：「値するもの」(7/14)

先日の小欄で、毎日が何かの記念日だと書いた。フランス革命が始まった7月14日、仏語の キャートルズ・ジュイエ は、月日が一つの固有名詞になっていて、きょうが、220周年になる。

革命というほどの激変はなくても、次の衆院選の投票日は長く語り継がれる日になろう。ようやく8月30日に定まったという。都議選のあまりの負けっぷりに、麻生首相が先送りをのんだらしい。さて、この「解散宣言」で麻生おろしは収まるだろうか。

ともあれ、総選挙の日程が固まり、政治家もそうでない人も予定を立てやすくなる。在京のフランス人外交官が「8月上旬の投票だと夏休みがつぶれる」と、気をもんでいたのを思い出した。

何の日取りにしても、定まるまでが落ち着かない。例えば、伝えられるキリンとサントリーの経営統合である。日本産業史に太字で記されるべき業界再編も、実現までにはいくつもの交渉が待っていよう。とりあえず乾杯、とはいかない。

あまたの出来事のひとつ握りが、共通の時代体験として歴史に刻まれる。新聞のコラムに務めらしきものがあるとすれば、年表には縁のない喜怒哀楽をすくい上げることかもしれない。大ニュースを論じるだけでなく、ささやかでも「値するもの」を書き留めていきたい。

すでにお気付きの方もあろうが、本日から小欄の左下に日付が添えられている。切り抜く時に便利なようにと、前々からご要望が多かったものだ。ではこれが切り抜くに値する内容だったかと、いつもの通りおしまいの行に来て反省しきりである。

<キャートルズ・ジュイエ(パリ祭：7月14日)>

7月14日に設けられている国民の休日。1789年同日に発生しフランス革命の発端となったバスチーユ監獄襲撃および、この事件の一周年を記念して翌年1790年におこなわれた建国記念日が起源となっている。

なお、フランスでは単に「キャートルズ・ジュイエ」と呼ばれ、「パリ祭」は日本だけの呼び名である。

これは、映画『QUATORZE JUILLET』が邦題『巴里祭』として公開されヒットしたため、邦題の考案者は川喜多長政である。



### 編集手帳：「うれしい選挙」(7/14)

サッカーの元Jリーガー呂比須(ろべす)ワグナー選手は語っている。一番うれしい試合は、自分がゴールを決めて勝った試合。2番目にうれしい試合は、自分がゴールを決めて負けた試合 であると。

サッカーの名言を集めた「蹴球神髓」(出版芸術社)の一節だが、正直といえば正直、個人技に身を削る競技者には、自分本位もときに美質だろう。政治家にも美質かどうかは知らない。

一番うれしい選挙は、自分が解散して勝つ選挙。2番目にうれしい選挙は、自分が解散して負ける選挙 ...というわけでもあるまいが、麻生首相がきのう、衆院解散・総選挙(8月30日投票)の日程を決断した。

3代続きの政権投げ出しはご法度とはいえ、都議選で惨敗した翌日である。「うれしい選挙」の1番目と2番目の間に、ほかの誰かが解散して勝つ選挙 という選択肢も考慮し、てっきり何日間か悩むものと思いきや、これが悩まない。空恐ろしいくらい、いい度胸をしている。

党のために一身をなげうつ政治家ならば過去にもいた。一身のために党をなげうった政治家はいない。ともあれ、キックオフの秒読みが始まる。

< 呂比須ワグナー (1969-) >

ブラジル出身の元サッカー選手。1997年に日本へ帰化、現在、ブラジルのパウリスタFCでアシスタントコーチ。

サンパウロ州フランカ市生まれ。1986年サンパウロFCとプロ契約。

18歳で日産自動車サッカー部(現横浜F・マリノス)に所属し、3年間プレーした後、日立(現柏レイソル)、本田、ベルマーレ平塚(現湘南ベルマーレ)、名古屋グランパスエイト・FC東京に在籍し、アビスパ福岡で選手生活を終えた。

その間、得点王4回、ベストイレブン4回、天皇杯優勝('99)というタイトルを獲得。97年に日本国籍を取得し日本代表へも選出される。



### 余禄：「切り札の効用」(7/14)

政治は権力をめぐる駆け引きが伴うからゲームにたとえられることも多い。その際には混乱を一気に決着させる「切り札」を持つ人は圧倒的に有利なのが普通だろう。自らが望む時に民意を問い直せる衆議院解散権は、首相の最後の切り札にほかならない。

だが英語には「誰々に切り札を切らせる」という言い回しもある。「誰々を窮地に追い込む」という意味である。切り札も自分の思い通りに使ってこそ勝利を呼ぶが、追い込まれたあげくに窮余の策として切られるようでは負けゲームだ。

自民党の惨敗となった東京都議選から一夜明け、麻生太郎首相は「21～24日衆院解散、来月30日に衆院選投開票」との日程を示し、与党幹部らの了承を得たという。来月上旬の投開票を模索してきたといわれる首相だったが、与党内の衆院選先送り論に感じざるをえなかったようだ。

それにしてもあまり例のない1週間以上も先の解散予告だ。これも「麻生降ろし」の動きを封じるためというが、逆に首相への反発の激化を予想する向きもある。「切らされた切り札」では主導権の回復はなかなか難しいのが政治ゲームだ。

思えば昨秋、自民党が衆院解散 - 総選挙のために選んだ麻生首相だ。それが決断をためらううちに、たどり着いたのが与党には最悪の環境での解散・総選挙である。来月30日の投開票は衆院の任期満了選挙の日程より1週間遅れだから、切り札の切り時も何もあつたものでない。

さすがに首相もここまでの自らの勝負師としての首尾については失望していよう。残された道はただ一つ、駆け引きなしのマニフェストを打ち出す正攻法で政治決戦にのぞむことである。

### 東京：「衆院選 マニフェスト採点 知事パワー見参」(7/16)

三重県伊勢市で十四、十五の両日開かれた全国知事会議は、「衆院選での特定政党の支持表明」は見送ったものの、地方対策については各政党のマニフェスト（政権公約）を採点し、衆院選公示前に公表することを決めた。政党を独自に評価することで、選挙後に中央政府による地方分権の推進を狙う。総選挙が近づく中、各党も発信力を増す知事たちの言動を無視できなくなっている。



#### < マニフェスト >

「政策綱領」「政権公約」「政策宣言」などと訳され、選挙において有権者に政策本位の判断を促すことを目的として、政党または首長・議員等の候補者が当選後に実行する政策を予め確約（公約）し、それを明確に知らせるための声明（書）の意味で使われる。

1999年の統一地方選挙の頃から作られるようになったが、配布すると公職選挙法に定められた不特定多数への文書図画の頒布の制限に抵触するとされ、選挙期間中の配布は行われなかった。

2003年の公職選挙法改正によって、補欠選挙を除く国政選挙では政党がマニフェストを選挙期間中に配布できるようになり、2003年の衆院選では、民主党がマニフェストの作成を宣言し、他党もそれに追随することとなった。